

Q小学校（特別支援学級）

【学校の概要】

Q小学校は、明治時代の自治体制度実施による合併を経て開校された学校である。平成22年度に総務省の情報通信技術地域人材育成・活用事業「地域雇用創造 ICT 絆プロジェクト（教育情報化事業）」を受けたモデル校2校の内の1校であり、4年生以上の児童を対象にすべての通常の学級に電子黒板と無線LANを設置するとともに、児童一人一人にタブレット型コンピュータが整備されている。このタブレット型コンピュータには、市教育委員会によってあらかじめ教育関連のアプリケーションが数種類インストールされている。平成27年度の学級数は、通常の学級が6、特別支援学級が2（自閉症・情緒障害、知的障害）である。

【特徴的な点に関するまとめ】

本事例では、大型ディスプレイとノート型コンピュータ、教育ソフトウェアを使用して分数の学習を行っていた（図4-3-8）大型ディスプレイにノート型コンピュータの画面を表示させ、アニメーションなどで児童の興味・関心が高められていたとともに、分数の足し算について視覚的にも確認を行うことができていたと考えられる。また、対象の児童は書くことに困難を抱えていたが、ノート型コンピュータを活用することで答えの数字をスムーズに入力できていた。なお、他の授業を受ける際には、タブレット型コンピュータのメモ機能を使って板書を行うこともあるということであった。また、学習に活用したい内容の学習者用デジタル教科書がない場合でも、本事例のように、指導者用デジタル教科書の付箋機能を使い、一部分を最初からは見えないように隠しておくことで、特別支援学級での個別指導に使っている点には工夫が感じられた。

【特徴的な事例】

（1）児童生徒が参加する授業

- ①教科名等 算数「分数」
- ②授業の目標等

授業の目標は、約分ができる場合の加減計算の仕方を理解し、その計算ができるようになること。観点別学習状況の評価の観点は、「知識・理解」、「技能」、「思考・判断・表現」である。

（2）児童生徒の実態

- ①学年 4年生
- ②指導の場 自閉症・情緒障害特別支援学級
- ③児童生徒の障害および課題（特性・ニーズ）

対象となる児童生徒の障害は、ADHD（注意欠陥／多動性障害）および「LD（学習障害）」である。「書く」こと（とりわけ、漢字の書き）と「読む」ことに困難さがある。知的発達に大きな遅れはないが、算数と国語については個別授業を行っている。他にも、家庭科、図工では支援を行っている。また、ビジョントレーニングと記憶力トレーニングを実施している。

(3) ICT 活用について

①使用した支援機器・教材の名称

ノート型コンピュータ、ソフトウェア「奇跡のソフト」、指導者用デジタル教科書

②活用のねらい

算数への興味・関心を高める。

③授業における支援内容

ノート型コンピュータで「奇跡のソフト」を使い、分数の足し算の計算をする。なお、奇跡のソフトとは、小学校の算数を対象とした教育ソフトウェアであり、図やグラフなどを視覚的に提示することができるものである。問題によっては、ホワイトボードに計算式を書きながら、分数の足し算の計算を行う。最後に、指導者用デジタル教科書を使って練習問題を行う。この際、答えの部分が付箋機能で隠しておくことで、指導者用デジタル教科書を個別学習でも使えるように工夫している。

④ ICT 活用による児童生徒の変容や評価

ノート型コンピュータのソフトウェアや指導者用デジタル教科書を活用することで、集中することが難しい児童に対して、興味・関心を抱かせ、集中力を持続させることができていた課題に対して、自ら学ぼうとする姿勢がみられた。

(西村崇宏、梅田真理)

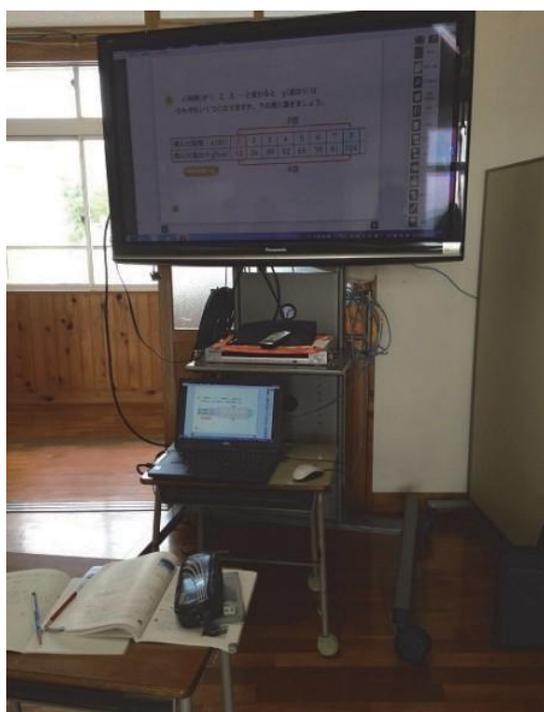


図 4-3-8 ノート型コンピュータに接続した大型ディスプレイにソフトウェア画面を表示させている様子

※ 本事例（特別支援教育教材ポータルサイト掲載事例）は、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所「C-94 障害のある児童生徒のための ICT 活用に関する総合的な研究－学習上の支援機器等教材の活用事例の収集と整理－」（平成 28 年 3 月），108-109 に記載された内容である。